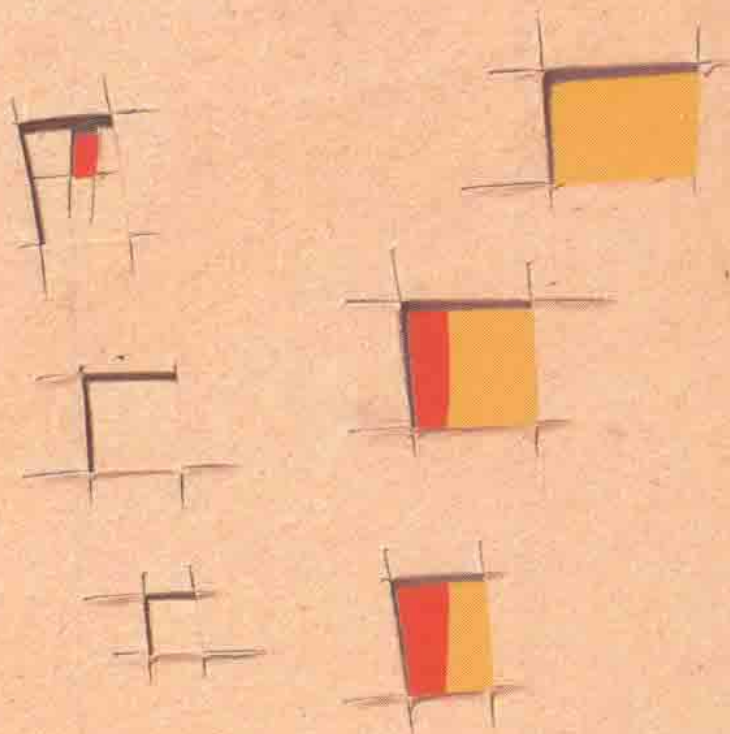


草笈



瀬戸内寂聴

中公文庫



中公文庫

くさ いかだ
草 筏

定価はカバーに表示してあります。

1998年3月3日印刷

1998年3月18日発行

著者 ^{せ と うちじやくちよう}
瀬戸内寂聴

発行者 笠松 巖

発行所 中央公論社 〒104-8320 東京都中央区京橋 2-8-7

TEL 03-3563-1431(販売部) 03-3563-3664(編集部) 振替 00120-4-34

©1998 CHUOKORON-SHA, INC. / Jakucho Setouchi

本文・カバー印刷 三晃印刷 用紙 王子製紙 製本 小泉製本

ISBN4-12-203081-1 C1193

Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

草

筏

瀬戸内寂聴

中央公論社

目次

誕生日

7

ゆく川の

30

山径

52

ゆめの記

75

帽子

99

沙羅

124

解説	蝶の昼	遷化	石	夜の虹	花束
林真理子					
273	240	217	194	171	148

草
筏

誕生日

五月十五日は輝くような五月晴れだった。前夜降り通した雨がすっきりと上り、樹々は爽やかなさみどりを陽光にきらめかせていた。

満七十一歳の私の誕生日である。この日は京都の葵祭りにも当るので、毎年、雨戸を繰った瞬間に青空を仰ぐと晴れやかさが二倍になって感じられる。

京都に住みついてからも、いつのまにか二十五年が過ぎ、五十一歳の秋、出離して、西大路御池の家を畳み、奥嵯峨の小倉山の麓にこの庵を開いてからも、すでに足かけ二十年の歳月が経っていた。建てつけの悪くなった雨戸を途中で引きあぐねたまま、私は雨戸にもたれるようにして庭を眺めた。改めて洗われた新緑の瑞々しさに息をのむ想いで、今朝は格別ふっくらと盛り上っているように見える苔の色の鮮やかさに見惚れていた。例年な

ら、今日が盛りの縁沿いの牡丹は、今年はすべての花の開花が早く、四月の末から開き、狂ったような絢爛さで例年よりも賑やかに咲ききったかを見ると、いさぎよく散ってしまっていた。最後の白の一輪だけが辛うじて葉蔭にひっそりと残っている。

この牡丹は九年前癌で死亡した姉が、生前三十株ほどいきなり送ってくれたものであった。全部は根着かなかったけれど、ほとんどが土になじみ根を下した。姉は自分の隠居所の庭に牡丹を造り、それを自慢にしていた。

「鎌倉の尼寺で牡丹を見たのがとても似合っていたから」

と姉はいったが、私も牡丹を嫌いではなかった。格別の手入れをしているわけではないのに、牡丹は年々に花の数を増してくるようである。姉は最初に開いた花を惜し気なく剪って、父母の仏前に供華するのが氣持がいいといっていた。

姉の死後は、私も最初の牡丹をさっくり剪り落し、姉の霊前に供華する習いになっている。年によってその初花は色を変える。今年は燃えるような深紅のたわわな牡丹であった。

あの年は異常に寒い冬であった。それを覚えているのは、姉が最後の病室にしていた故郷の家の離れの庭に、いつ見舞っても雪が残っていたし、障子をあげさせて、姉が降る雪をしきりに見たがったからだだった。

添寝している私は夜中に目を覚めた。闇の中で、姉の切なげな深いため息がもれた。

「痛いのか？　せこいの？」

私はスタンドの灯の一番弱いのを点けた。

それには答えないで、

「雪がまた降ってきた」

と姉がいった。耳をすましたが雨戸の外の雪の気配など聞きとれるわけはなかった。それでも異常に鋭敏（鋭敏）になっていく病人の耳には雪の音さえ聞きとれるのかと、私は背中が冷くなった。姉の軀の向きをかえさせ、私は坐り直して姉の腰をさすった。もともときゃしゃな軀つきだったが、四ヵ月の病床生活の中で、姉の軀は子供のように小さくか細くなっていた。人工肛門の処置をしてくれという。私はスタンドの灯を一段明るくして、命じられたことをした。手遅れの直腸癌の手術をしたのは前年の十一月で、医者は手術をしてもあと三月の寿命だといっていた。姉には癌だとは告げてなかった。

人工肛門をつけたのは一ヵ月前だった。袋のとりかえを姉は誰よりも私が上手だという。それは私への甘えと受けとって、見舞いに行っている間は、私はその役を引き受けていた。もうその頃は家政婦が二人付いていたが、夜は肉親の誰かが添寝することにしていて。姉は子供の頃から母に似て色が白かった。私は顔は母親似なのに、軀つきや軀の色は父親似で浅黒（浅黒）かった。六十六歳の姉の腹はメスが入った後もまだ白くなめらかだった。痩せ衰え

た今でも、まだ腹は皺(しわ)ばんでいなかった。その腹にまた穴があけられ人工肛門がつけられたのだが、その型が小ぢんまりして赤い梅のようだというのが姉のせめてもの慰めだった。「医者(せんせい)が、こんな可愛らしい人工肛門見たことないっていうてくれたんよ」
そんな自慢をする姉に、私は調子を合わせ、

「臍美人って聞いたことあるけど、お姉さんは肛門美人なのね」

と笑っていった。姉はく、く、くと咽喉を鳴らしてさもおかしそうに笑った。私は袋をとりかえる度に、つとめて、

「わあ、きれいな便だ」

と感嘆してみせた。ほとんど食が咽喉(いんこう)を通らなくなっている、便はわずかながら出るのだった。

「女の子を一人産んでおくんだった」

姉がふっとつぶやいた。

「え、どうして」

「こんなふうに長く寝つくと、自分の娘の世話になるのが一番気が楽でしょうが。ま、あんたがいてくれるからいいけれど」

姉には二人の息子がいて、それぞれ嫁がいたが、嫁たちに下の世話にだけはなりたくな

いらしかった。

「娘だって今時、看てくれるかどうか、それに嫁に行ってしまったえば、そう里に泊りがけの看病なんか出来ないでしょう」

「……そうね。それにしても、あんたはやっぱり可哀そうね」

私は言葉につまって、姉の表情をうかがった。もう一週間持つかどうかかわらない病人から、可哀そうにといわれたことに不意をつかれた。

姉は私が夫の許に残してきた娘のことをいつているのだ。娘は三歳の時、私に出奔され、^{のちで}後添いに来た義母に育てられている。小学校からアメリカンスクールに通い、大学もアメリカですませてきた。私の後に来てくれた人がアメリカ育ちの二世だったせいもあるが、娘の父親の話では、東京のカソリックの幼稚園に入れたら、シスターに苛められて泣いて帰ったという。それで、幼稚園は止めさせ、小学校からアメリカンスクールに入れたというのだった。苛められたのは、お前の母親は夫や娘を捨てて出ていった悪い女だといったとか。幼稚園の子供に向ってそんなことをいう筈があるものかと、それを聞いた当時私は思い、これも別れた夫の、私への厭がらせの造り話だと長い間思っていた。その後、未婚の母の子供や、離婚した母親の育てている子がカソリックの学校で入学拒否にあったという話を、その母親たちから直接聞く機会があって、別れた夫のいった話は本当だったのだ

と信じるようになっていた。

娘が二十八歳まで結婚しなかったのも、縁談がまとまりかけると、実母が私だということとがわかり、話がこわれると聞かされていた。私が出奔して二年後に、夫は新しい結婚をする為、ようやく私の籍を抜いてくれた。その時、それを告げに京都にいた私の所に来た夫と逢ったきり、娘が結婚する一年前まで逢ったことがなかった。

その時の再会はどちらが良かったものか、忘れてしまった。たぶん私の方から、何とか文筆でやっていけるめどもたったことだから、娘のことで、蔭ながら手伝わせてもらえることがあれば教えてほしいと申し出たように思う。

その時、ホテルの中華料理店で向きあつた娘の父親は、別れた頃とあまり変らない容姿のまま、私を憐れむような目で終始見ていた。

娘が義母と如何に仲がよいか、世間では二人をなさぬ仲だとは誰も信じていないということ強調していった。親の欲目かもしれないがチャージングな娘に成長している。娘の養母に対して、彼は深い尊敬と恩義と愛を感じているともいった。アメリカ留学中、娘が養母に、ほとんど毎日、日記ふうの手紙を送りつづけてきたともいった。私は頭を深く垂れたまま、料理の皿に涙を油のようにしたたらせていた。

「わが家はみんな洗礼を受けています。日曜日には揃って教会に行っています」

別れる時、娘の父親はちよつと声を改めるようにして、

「今後、彼女のことはノータッチにしていたくださしょう」

といった。私は刑の宣告を申し渡された被告のように、いっそう深くうつむいた。

「食べないんですか、それ。美智が大好きなんだ、もらっていきます」

といって、春巻を包ませた。あわてて私が買い加えた饅頭の箱と一緒に持ち去ってくれたのだけが、せめてもの氣やすめだった。

私のために、娘が学校から泣かされて帰ったり、縁談もまとまらないなどということは、すべてその時間かされたものだ。

その後、娘は結婚した。娘の結婚の相手は、私が京都の友人のS教授から紹介された人物で、中京の茶菓子屋の老舗の次男だった。京大からアメリカへ留学し、その頃、アメリカの商社に勤めていた。娘には願ってもない相手だった。私の友人夫妻は、夫とも北京時代からの知人だったので、私はタッチしていいことにして、S夫妻からだけの話として進めてもらった。娘の父がそのからくりをどの程度察していたかわからないが、表向き通りの話として受け入れ、この縁談は信じられないほどの速さでとんとん拍子に決ってしまった。

結婚後アメリカに住んでいた娘は、女の子と男の子の母親になっていた。

娘の夫は結婚前から私と逢っているの、複雑な妻の里の家庭に波風を立てないように気を配りながら、いつ頃となく、私に自分の家族を引きあわせてくれている。表向きはあくまで娘の父や養母には秘密裡という形を保っていた。

孫たちは両親の風変りな知人という程度にしか、私を理解していない。

やがて娘の夫が日本支社に転任したので、娘一家はアメリカから引き揚げてきた。彼女たちの家庭の情況や孫たちの成長の過程は、筆まめでよく気のつく娘の夫から、私はずっと写真を送られつづけていたので、大体は承知していた。日本の同年輩のサラリーマンよりは、はるかに大きな快適な家に住み、子供たちも郊外の広い庭つきの家でのびのびと育っていた。どの写真の娘も幸福そうな表情をしていた。とはいっても長い歲月、娘からは、ハガキ一枚来たことがなかった。

「英語は文章も字もうまいんですが、日本語は小学生並みですからね、恥しいんですよ」娘の夫はそんないい訳をして、その分いっそう筆まめに近況を知らせてくれるのだった。この婿の時雄とはいくらでも気易く話せるのに、いつまでたっても娘の美智とは妙にぎこちなくなつて、電話の中でさえ言葉はとぎれがちになつてしまふのだった。

別れた夫の言葉を私は思い出す。

「彼女が二十になった時、あなたのことをぼくの口からはっきり話しておこうと思って話

しかけたことがあるんです。その時、美智はもういい、何も聞きたくない。大体みんな知ってるといって、両手で耳をふさいだんですよ。それ以来、ぼくたちの間では、一切あなたの話はしていない。ぼくの家庭では三人の間に秘密はどんなささいなことでも一切持たないというのが家憲になってるんです」

人間どうしの交りの中で、一かけらの秘^{かく}しごともない生活なんて出来るだろうか。あるだろうか。もしあったとすれば、それこそ偽善^{いつはり}にみちた気味の悪いものではないか。私はそれを聞いた時、うなだれた頭の中で、そんなことを思いめぐらせたのを覚えている。

娘が私と夫が別れることになったいきさつを、どの程度知っているというのか。彼女は英語の本は読め、論文は書いても、自分を捨てた母の書いた小説など読みこなす能力はない筈であった。それをむしろ期待して彼女の父親はアメリカの教育を受けさせたのではなかったか。

姉は私が話さないかぎり、娘と私の関係がどうなっているのか等、訊いたことがなかった。私の方からも積極的に娘との関係を姉に話そうともしなかった。話して喜んでもらえるような進展^{しんぜん}ぶりが無いからであった。姉にはいわなかったが、私はごく親しい友人には冗談めかしていつていた。

「この世の中に私は何一つ恐^{おそ}しいものがないのに、たった一つ怖いものがある。それは美